

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 31 日現在

機関番号：47501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520201

研究課題名(和文)オノマトペを活用した芸術鑑賞における感性評価

研究課題名(英文) Deepening of art appreciation by letting students evaluate art works by using onomatopoeia

研究代表者

関口 洋美 (Sekiguchi, Hiromi)

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：70435379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は大きく分けて2つであった。1つは、鑑賞授業における鑑賞文の作成を支援する鑑賞シートを開発することである。なお、鑑賞シートは、オノマトペによる感性評価を中心として、子どもたちが答えやすいものを目指した。もう1つの目的は、完成した鑑賞シートを授業で使用してもらい、鑑賞文の作成に効果があるかを検証することである。

結果、21語のオノマトペから構成される鑑賞シートが完成した。本鑑賞シートの実証授業では、多くの子どもたちが鑑賞文の作成がしやすくなったと回答してくれた。特に、普段鑑賞文を書くのが苦手な子どもたちに有効に働くことが実証された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is roughly divided into two types. One is to develop an appreciation sheet that helps students to create an appreciation statement in art class. To achieve this purpose, I constituted the appreciation sheet by using onomatopoeia, because I thought that it became easy to reply it for students. The other purpose is to confirm that the appreciation sheet that I made gives promoting effects in the writing activity of students.

In results, I completed an appreciation sheet to be constructed by 21 onomatopoeias. And many students reported that the writing of appreciation sentences became easy in the class by using this appreciation sheet. Particularly, it was demonstrated that onomatopoeias are effective for students who are weak in writing appreciation sentences in usual times.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術諸説

キーワード：鑑賞 感性評価 オノマトペ

1. 研究開始当初の背景

芸術作品を鑑賞した際に何らかの評価や印象を持っているが、それがどのような構造なのか、それが他者とどのように違うのかを話し合うことは、専門家同士以外ではほとんどないと言ってよい。しかし、もし芸術鑑賞における評価や印象の下位構造が明らかになれば、鑑賞がより一層深まるだろう。また、小中学校の芸術教育における鑑賞の授業でも使える鑑賞用質問紙があれば、授業がより活性化されるのではないだろうか。

ところで、「オノマトペ」は英語の *onomatopoeia*、フランス語の *onomatopée* からきており、擬声語のことである。このオノマトペは、形容詞などよりも微妙なニュアンスを伝える力があるとして着目されるようになった。また、オノマトペは形容詞や形容動詞のように、状態を表現するだけでなく、伝える側の感情も一緒に表現しているとされている。このように、オノマトペは状態や感情を伝える言葉として有用性が高い。

そこで、このようなオノマトペの特性は、芸術鑑賞の評価用語として有用なものではないかと考えられる。芸術作品を鑑賞する際には、時に分析的な評価を要するが、印象や感想も同時に抱く。この、物理的評価と印象などの心的状態を伝える能力の高いオノマトペは、まさに芸術鑑賞に用いるのには最適な道具であると考えられる。

2. 研究の目的

小中学生の鑑賞の授業において、鑑賞文を作成するのはとても困難である。そこで、鑑賞文の作成を支援するような鑑賞シートの開発を目的とする。

さらに、鑑賞シートの効果を確かめるために、実証授業を実施する。実証授業では、子どもたちから鑑賞シートについての感想や、鑑賞文が書きやすくなったかなどについて調査を行い、鑑賞シートの効果を検証する。

3. 研究の方法

(1) 鑑賞授業に対する教員の意識調査

現場のニーズに沿った鑑賞シートを開発するために、現職の教員からのインタビューを実施する。鑑賞の授業が確実に確保されている、中学校の音楽と美術の教員を対象として、鑑賞授業に対する意識構造が明らかとなるように、PAC分析というインタビュー手法を用いてインタビューを実施する。

(2) 芸術鑑賞に適切なオノマトペの選出

オノマトペの選出にあたっては、2つの方法を取り入れる。1つは、本研究者がオノマトペ辞典やオノマトペを用いた研究などから芸術鑑賞における感性評価に適正と思われるオノマトペを選出する方法である。もう1つは、本学学生の美術科及び音楽科の学生に対し、予備調査を行い、オノマトペを選出する方法である。予備調査では、好きな美術作品、嫌いな美術作品をあげさせ、その作品

に対する印象をオノマトペで表現してもらう。同様に音楽作品についてもたずね、その回答を集める。

(3) 感性評価項目決定のための調査

以上で作成した項目案をもとに、大規模調査を行い、芸術鑑賞における感性評価尺度として有効なオノマトペのみを絞り込んでいく。

(4) 質問紙項目の決定と項目分析

大量に収集したデータから、信頼性・妥当性の高い項目を絞り込み、質問紙項目を決定していく。また、オノマトペはその曖昧さが特徴のため、皆が同じように感じ取っているか不明なことが多い。そこで、選出されたオノマトペについて、それぞれのニュアンスが一樣に感じられているか、追調査を行う。多くの人に同様のニュアンスを伝えうるオノマトペを抽出し、項目を決定する。また、項目決定する際には、因子分析などを通じて、芸術鑑賞の評価の視点などを明らかにしていく。項目が決定したら、この感性評価項目を中心とした鑑賞シートを作成する。

(5) 鑑賞の授業に質問紙を用いた効果の検証

実際の鑑賞の授業において、本鑑賞シートを使用してもらい、その効果を検証する。検証には、生徒たちへの質問紙調査と授業者へのインタビューを用いる。生徒たちへの質問紙調査では、感性評価質問紙を使うことによって、普段の鑑賞の授業より積極的に取り組めたか、また深い鑑賞ができたかなどをたずねる。授業者へのインタビューでは、通常の鑑賞の授業に比べて効果があったか、また、より効果的な質問紙の使い方などについて調査する。このような検証を数回行い、質的データから検証を行っていく。

4. 研究成果

(1) 鑑賞授業に対する現職教諭の意識の調査

方法

協力者：千葉県内公立中学校美術教諭1名（以下S、女性）、千葉県内公立中学校音楽教諭1名（以下U、女性）。

調査日：美術教諭には2011年12月24日に実施し、音楽教諭には2012年2月4日に実施した。

手続き：それぞれが勤務する中学校の1室を借り、調査を実施した。調査には、内藤(1997)が開発したPAC分析を用いた。PAC分析の主な内容は、自由連想、連想された語に対する類似度評定、類似度評定をもとにクラスター分析を行った結果(デンドログラム)の解釈に対するインタビューである。自由連想においては、「あなたが“鑑賞授業”と聞いて思い浮かぶものを、単語でも文章でも出来事でも何でもいいので、思いついた順に紙に書いていってください。これ以上でないと思ったら、やめてください。なお、できるだけご自身の授業を意識して思い浮かべてくださ

い。」と教示した。

結果

美術教諭Sの結果

自由連想によって思い起こされた語は 15 個であり、連想時間は 2 分 35 秒であった。類似度評定を経たデンドログラムは、3つのクラスターに分けられた。それらは、デンドログラムの上から順に、①(美しさ 西洋文化 日本文化 技術 技法 良さ 感情移入 作者の気持ち 形 色彩)、②(立体 平面)、③(文章 言語活動 難しいと感じる)であった。なお、クラスターの分け方については、協力者とインタビュアーが協議し、決定した。それぞれのクラスターについては、①は「作品から読み取れるもの」、②は「作品の形態」、③は「鑑賞文：自分の思いを言葉にして伝える手段」と語った。ただし、①において、西洋文化と日本文化が同じクラスターに入ったことに関しては違和感を覚えると語っている。

音楽教諭Uの結果

自由連想によって思い起こされた語は 13 語であり、連想時間は 8 分 30 秒であった。類似度評定を経たデンドログラムは、3つのクラスターに分けられた。それらは、デンドログラムの上から順に、①(ヨーロッパ 歴史)、②(深く知れば知るほど楽しい 日本歌謡・特に民謡への興味のもとせ方が難しい ポイントをあてる場所が難しい 曲の聴かせ方や発問によって子ども達のとらえ方が変わる 準備を要する できる限り映像をつけたい 音源が多い)、③(最近ではCMやドラマ等で使われているため興味を引きやすい オーケストラが多いため実際の楽器を見せて音を聴かせたい 上手に文章表現できない子の評価方法 歌唱・創作との時間配分)であった。それぞれのクラスターについては、①は「背景」、②は「授業の内容」、③は「導入とまとめ」と語った。

(2) オノマトペの選出

オノマトペの選出

すべてのオノマトペが鑑賞授業の感性評価に適切であるというわけではない。したがって、より適切なオノマトペの候補を選び出さなければならない。そこで、予備調査と筆者及び本研究の連携研究者により適切なオノマトペを選出することとした。

予備調査の方法

調査日：2011年4月12日。

調査協力者：本学美術専攻学生 21 名(男性：1名、女性：20名)、本学音楽専攻学生 21 名(男性：1名、女性：20名)。

調査内容：以下のとおりである。

- ・好きな作品とその作者、およびその作品の分野
- ・好きな作品を鑑賞した時に感じたオノマトペ
- ・嫌いな作品とその作者、およびその作品の分野
- ・嫌いな作品を鑑賞した時に感じたオノマト

ペ

いずれも自由記述による回答を求めた。なお、作品の分野は回答を分野別(美術作品、音楽作品、映像などのその他の作品)にするために記入してもらった。

予備調査の結果

質問内容別に選出されたオノマトペを集計した。好きな美術作品についてのオノマトペは 43 種類、嫌いな美術作品に対するオノマトペは 52 種類、そのうち好きな美術作品と嫌いな美術作品とで重複していたオノマトペは 7 種類あった。好きな音楽作品に対するオノマトペは 71 種類、嫌いな音楽作品に対するオノマトペは 28 種類、そのうち好きな音楽作品と嫌いな音楽作品とで重複していたオノマトペは 6 種類であった。その他の分野で好きな作品に対するオノマトペは 40 種類、その他の分野で嫌いな作品に対するオノマトペは 35 種類であり、好きなその他の作品と嫌いなその他の作品とで重複していたオノマトペはなかった。

予備調査を踏まえたオノマトペの選出

予備調査だけでは十分なオノマトペがあげられたとは言えないため、オノマトペ辞典(小川 2007)に掲載されているオノマトペを参考に、美術作品および音楽作品の鑑賞において生起されると思われるオノマトペ 98 個を筆者が選出した。その後、上記の予備調査において頻度の高かったオノマトペ、予備調査と筆者選出とで重複したオノマトペを中心に 46 個のオノマトペに絞り込んだ。

この 46 個のオノマトペを参考に、2 人の心理学者により、Marković & Radonjić (2008)の絵画に見られる顕在的屬性評価項目と潜在的俗世評価項目の因子などと照らし合わせながら、作品鑑賞に関連すると思われる因子を想定し、因子の内容に当てはまるオノマトペを整理した。そして、当てはまるオノマトペが少ない因子についてはオノマトペを追加した。なお、本研究では鑑賞の対象を絵画に限っておらず、音楽作品についても視野に入れているが、Marković らの因子は音楽作品の鑑賞にも当てはまると判断し、この因子を参考にした。最終的に以下の 61 個のオノマトペを選出して、2 人の同意を得た。きゅん、どきどき、わくわく、が一ん、ぞくっ、きよとん、しんみり、どぎまぎ、しくしく、はらはら、くよくよ、むかむか、いらいら、がっくり、あたふた、ころころ、ぐらぐら、すと一ん、とんとん、ふらふら、ずど一ん、どっしり、ふわり、がんがん、ど一ん、ず一ん、わーわー、し一ん、ざわざわ、ざ一、がやがや、ぎゃ一、きらきら、ぎらぎら、ぬるぬる、ぴかぴか、べたべた、もやもや、どろどろ、さらさら、だら一、ぽか一ん、ぴりぴり、びくびく、かりかり、がりがり、ふわふわ、こちこち、ぷによぷによ、かちんかちん、ふんわり、ふかふか、す一、さ一、ぐちゃぐちゃ、ごちゃごちゃ、ぞろぞろ、がさがさ、すっきり、ちゃらちゃら、こてこて。これらのオノ

マトペに対し、作品を見てどのくらい感じたかを6段階で評定させる質問紙を作成した。

(3) 感性評価用紙のためのオノマトペ抽出調査期間：2011年11月～2012年7月。

対象：大分県立芸術文化短期大学学生および千葉県成田市立遠山中学校生徒のべ374名。

鑑賞作品：絵画作品は「モナ・リザ(ダ・ヴィンチ)」「接吻(クリムト)」「糸杉のある風景(ゴッホ)」「大谷鬼次(奴江戸兵衛(写楽))」「ゲルニカ(ピカソ)」「タンギー爺さんの肖像(ゴッホ)」。音楽作品は「四季(ヴィヴァルディ)」「魔王(シューベルト)」「モルダウ(スメタナ)」。

質問紙：61のオノマトペに対し、どのくらい感じたかを6段階(かなり感じる・感じる・やや感じる・あまり感じない・感じない・全く感じない)で評定してもらう質問紙を用意した。

手続き：芸文短大の調査においては筆者が、中学校においては研究協力者である中学校美術教諭が、作品提示及び調査を実施した。絵画作品については、芸文短大ではプロジェクターで提示し、中学校では資料集を用いて提示した。また音楽作品については、芸文短大のみで調査を実施し、提示は教室に備え付けのDVD装置を使用した。いずれも作品を鑑賞した後に質問紙に回答してもらった。

結果

全てのデータを対象として、オノマトペの因子分析(最尤法、バリマックス回転)を行った。その結果から7因子を抽出し、負荷量の高い3項目ずつを感性評価項目に採用することとした。最終的に採用した21項目の因子分析(最尤法、バリマックス回転)の結果、および因子名は表の通りである。

表：21項目のオノマトペの因子分析の結果(最尤法、バリマックス回転)

	にぞやかさ	やわらかさ	いらだち	明るさ	すざさ	しずけさ	スリル
ごちゃごちゃ	0.31	-0.07	0.21	-0.01	0.08	-0.01	0.12
ごちゃごちゃ	0.74	-0.09	0.22	-0.03	0.11	0.04	0.10
がやがや	0.61	-0.11	0.23	0.14	0.24	-0.14	0.25
ふわり	-0.10	0.81	-0.06	0.27	-0.05	0.18	0.00
ふわふわ	-0.04	0.79	-0.03	0.31	-0.07	0.14	0.03
ふわわり	-0.18	0.71	-0.14	0.28	-0.13	0.32	-0.07
いらいら	0.22	-0.07	0.81	-0.03	0.18	-0.04	0.18
むむむか	0.26	-0.12	0.64	-0.04	0.22	0.09	0.10
かりかり	0.15	-0.01	0.58	0.09	0.19	0.05	0.18
びかりか	0.18	0.20	0.11	0.77	0.02	-0.05	-0.02
きらきら	-0.09	0.33	-0.05	0.72	-0.01	-0.01	0.07
わびわび	-0.03	0.20	-0.09	0.55	0.07	-0.10	0.23
ずどーん	0.21	-0.14	0.26	0.80	0.69	-0.06	0.22
どーんり	0.01	0.00	0.10	0.86	0.60	0.13	0.10
どーん	0.21	-0.08	0.24	0.81	0.66	-0.06	0.19
しんわり	0.01	0.14	0.02	-0.03	-0.02	0.72	0.04
しーん	-0.13	0.12	-0.06	-0.04	-0.02	0.65	-0.08
しやしや	0.14	0.17	0.24	-0.08	0.14	0.48	0.14
はらばら	0.21	-0.08	0.24	0.16	0.27	-0.14	0.66
どきどき	0.09	0.10	0.21	0.31	0.15	0.05	0.62
ぞっ	0.24	-0.06	0.17	-0.13	0.25	0.22	0.44
算術値	2.70	2.12	1.90	1.84	1.77	1.47	1.45
説明率(%)	10.46	10.10	9.07	8.78	8.44	7.00	6.91
累積説明率(%)	10.46	20.56	29.63	38.41	46.85	53.85	60.76

(4) 鑑賞シートを利用した鑑賞授業

授業実施日：2012年11月21日5限目の美術の授業。

授業実施者：千葉県成田市立遠山中学校の美術教諭。

授業対象者：同校の3年生29名(男子15名、女子14名)。

授業実施場所：同校美術室。

鑑賞作品：「赤い木」および「赤・青・黄のコンポジション」ともに、モンドリアン作。A4版の厚紙に印刷した作品を貼り、グループごとに1枚ずつ配布した。なお、鑑賞作品の選択および提示方法については授業担当教諭に一任した。本2作品について、担当教諭は以下の様に3つの選出理由を述べている。

理由1. 前年に抽象表現について学習していたため、抽象作品を見せたかった。前年にカンディンスキーの作品を鑑賞させていたため、モンドリアンの作品を見せようと考えた。ちなみに、カンディンスキーは「熱い抽象」、モンドリアンは「冷たい抽象」といわれ、対照的な作品であるため、比較して鑑賞しやすい。

理由2. モンドリアンの有名な『リンゴの樹』の連作を見ると、樹木の形態が単純化され、完全な抽象へと向かう過程が読み取れる。この「赤い木」はその連作の中の1枚であり、「コンポジション」はモンドリアンの中で抽象絵画の完成形である。そのため同じ作家でも時期によって全く作風が変わることを感じさせたかった。

3. 抽象と具象を比較させながら鑑賞することで、どのような作品でも鑑賞の仕方は同じであり、抽象表現でも作品から必ず伝わってくるものがあることを理解させたかった。また、抽象絵画もなかなかよく見ていくと面白いことに気付かせたかった。

配付資料：鑑賞シート2枚。なお、今回の授業においてそれぞれの作品に対する鑑賞文と、鑑賞シートを使った感想を記入する用紙を配布してもらった。

提示の仕方については、本来の絵の大きさとの関係は考慮したが、グループディスカッション時に絵が手元にある方がよいものと判断し、A4版を用いた。

授業の流れ：作品は①「赤い木」、②「コンポジション」とし、作品名を明かさずに、①・②として鑑賞した。各自で両作品を観察して、鑑賞シートの感性評価を行った。さらに、各自でグラフを書き終えたら、班ごとにグラフを比較しながら、どの因子が似ていてどの因子では差があるかなどを話し合い、鑑賞を深めた。なお、鑑賞文の記入は次の美術の時間に持ち越した。

結果と考察

<鑑賞シートの使用状況>

オノマトペをどのくらい感じたかに対する回答は、予想以上にスムーズであった。また、因子名が明かされていると回答を阻害するのではと懸念されたが、そのような様子はなく、生徒たちは率直に自分の印象を回答してくれた。なお、当初は因子名が見えることで回答がゆがむと予想し、合計する欄を折り、はがしやすい糊で止めた形で配布することも考えた。しかし、授業担当教員が予備的に使ってみたところ、「因子名が見えていても子どもたちの回答に影響する様子はなかつ

